

最上川流域

森・里・川・海の恵みと学び

— 農山漁村の自然と文化の保全と継承を目指して —



NPO法人

里の自然文化共育研究所

目次

- 1、はじめに・・・3
- 2、最上川流域の農山漁村紹介・・・4
- 3、森里川海の学び・・・6
 - (1) 森の学び・・・6
 - (2) 里の学び・・・8
 - (3) 川の学び・・・10
 - (4) 海の学び・・・12
- 4、自然と文化の保全と活用～学びから地域づくりへ～・・・14
- 5、おわりに・・・15

1、はじめに

日本の農山漁村には数多くの恵みが詰まっています。それは、森、里、川、海の持つ魅力を引き出し活用していくことで得ることができるものです。しかしそれは単に自然から与えられるものではありません。人々が長年かけて受け継いできた知恵と技術によって初めて可能なる業なのです。言い換えれば、生きていくための本当に大切なこと、原点がそこにはあります。

近年、日本の農山漁村は急激な過疎化と少子化に苦しむようになりました。人の手が加わることで得られる森里川海の恵みは、人がいなくなってしまうのははかなく消えてしまいます。それは、単に恵みが消えるだけではなく、そこに込められた人の思いまでが忘れ去られてしまうことを意味します。まさにこのことこそ、これからの時代を本当に豊かに生きていくための様々な可能性を葬り去ることを意味します。なぜならば、自然の恵みを保全し活用して農山漁村の知恵や技術それを支える考え方の基礎とでもいうべきものは、自然との共生、食の安全安心、生きがいや健康・福祉、コミュニケーションなど、現代社会における今後の課題に対する示唆に富んだものだからです。

NPO法人里の自然文化共育研究所では、農山漁村のふるさとの知恵や技術を、それを支える人々とともに次世代に伝え、学ぶだけでなく活用し、保全し再創造していくことを目指して、活動を続けてきました。本冊子はそうした試みのささやかな成果の一つです。森里川海出の学びは、座学だけではなく実際に現場に出て、五感で体験し、かかわる人々とコミュニケーションをとり交流を深めることで、はじめて達成することができます。そして、学んだことを活用し、農山漁村の営みに触れながら底に少しでも貢献していくということが今求められています。

こうした観点から、本冊子では知識をまとめるのではなく、これから実際に農山漁村に出かけ、森里川海に学び、その保全や活用に係るための謙虚な道しるべとなるように心掛けました。森里川海の恵みから学び、その魅力を保全し活用していくことで、次の世代に伝えていくという思いを多くの人と共有しつないでいくために。そんな目標に少しでも近づけることを願っています。

本冊子を取り上げる山形県の母なる川、最上川流域の農山漁村もまた豊かな自然と歴史文化に恵まれています。そこには数多くの知恵と技術、その地域の特性に合った暮らしの文化が息づいています。皆さんも本冊子を手にとり出かけてみてください。



写真：舟上からみる最上川の雄大な流れ

2、最上川流域の農山漁村紹介

山形県を北上し日本海にそそぐ母なる川最上川。ここでは特に山形県の北部（最上地方と庄内地方）の農山漁村を取り上げています。この地方は、古くから内陸の山間地域と平野部、そして漁村地域がつながりながら暮らしの営みを続けてきました。

集落を基本単位として考えるとともに、その相互のつながり支えあいについても考えながら学んでいくことが、郷土学習の際には大切です。また、学びに際して、そのそれぞれの地域の人々の日々の営みに密着しながら、地域づくりに取り組んでいる活動団体とつながることで、学びを生かした実践活動への可能性が開けていきます。

郷土学習活動を地域づくりに生かそうとしている地域と団体を下図の通りまとめてみました。その中で本冊子のプログラムを進めている6つのモデル地域を紹介します。



図：郷土学習活動に取り組む最上川流域（北部地域）の活動団体の位置図

(1) 庄内町清川「歴史の里清川連絡協議会」

最上川舟運の拠点だった清川の里は、月山を源とする清流立谷沢川と最上川との合流点にあります。ここでは、最上川の恵みで成り立つ川漁と、かつての舟運の歴史にちなんだ数々の史跡があります。「歴史の里 清川」をテーマに、



写真：最上川と清川の里

地元ガイドメンバーは防風林として保全されてきた御殿林を中心に保全活動や地域づくりにも取り組み始めています。

(2) 金山町田茂沢「田茂沢道草ぶんこう」

かつて分校だった校舎を利用して、地域の素材を使った創作教室や子どもたちや学生など外部から訪れる人たちと地元の高齢者との交流の場を作り出しています。農業やものづくりなど高齢者の知恵と技術を生かした「心のふるさと」づくりに取り組んでいます。



(3) 舟形町長沢「若鮎交流塾」

最上川支流の清流小国側に寄り添うように集落が形成されています。鮎を中心とした川漁が有名で、地域の水資源を利活用した交流に力を入れています。子どもたちに対する環境教育にも熱心で、若鮎交流塾が結成され交流と学びをテーマに活動を展開しています。



(4) 酒田市中野俣「中野俣を元気にする会」

最上川支流の中野俣川と経ヶ蔵を最高峰にする山々に囲まれた中野俣地区は、「杉と清流の里」がテーマです。地元の子どもたちを対象にした里山学習や川での生き物観察会などこれまで取り組んできた活動をベースにしなが、高齢者の知恵を借り、学生や外部の方々の協力も得ながら地域づくりプログラムへと継承発展させようとしています。



(5) 鶴岡市「松ヶ岡ねっと」

明治になって旧士族が開拓をした松ヶ岡地区は郷土の農業を生業とする歴史や思いが色濃く反映された取り組みを展開しています。ここでは地域農業の歴史を学びながらこれからの農村づくりについて学ぶことができます。



(6) 鶴岡市「三瀬地域づくり研究会」

日本海に面した三瀬地区は森と海の両方の恵みを体験できます。活動拠点となっているつるおかユースホテルでも「森の人講座」など独自のふるさとの自然学習プログラムに取り組んでいます。



3、森・里・川・海の恵みと学び

農山漁村に住む人々が中心となって育み活用してきた森里川海の恵み。そこには私たちが暮らしていくための大切な「基本」があります。どんなことを学ぶことができ、生かしていけるのか、どのようにしたらかわることができるのか、そんな観点から学びのヒントを集めてみました。

(1) 森の恵みと学び

東北地方の森は、原生自然だけではありません。人が手を加え木を植えて切って活用し、その森に寄り添って生息する植物や動物なども活用してきました。こうした森の生態系全体を注意深く観察し、きめ細かに謙虚にかかわりながら長年かかって育ててきた結果が豊かな森の恵みを生み出すことにつながっています。

森には、どんな恵みがあり、どんな仕事があり、どんなことが学べるのか、見てみましょう。

① 食～山菜・キノコ～

春から秋まで森には様々な山菜やキノコが採れます。春はフキノトウ、コゴミ、タラノメ、コシアブラ、夏はワラビ、ゼンマイ、フキ、ミズ、トビタケ、秋はマイタケ、モタツ、ナメコなど多種多様なキノコ類です。

重要なことはどんな場所にどんな山菜やキノコが育つのか、見つけるポイントだけではありません。も大切なのはとってきたものをどのように加工し保存し食べられるようにするのか。採取と加工・保存の知恵と技術はその土地・人ごとに少し異なります。その土地の風土に合った山の資源活用方法に学び実践していくことが大切です。



② 豊かな動植物

森には、山菜やキノコの他にもさまざまな植物、動物たちがいます。森の多様性はそこに住む動植物の多様性でもあります。そうした生き物たちの営みは、私たちが森にどのようにかかわればよいのか、森が今どういう状態なのかについて多くのヒントを与えてくれます。また、ウサギなどの動物は冬、マタギのおじさんたちによって貴重なタンパク源として地元住民に活用されてきました。



③ 森の手入れ－間伐・枝打ち－

多くの恵みをもたらす森を健全に維持していくためには、継続的できめ細やかな手入れが欠かせません。森の生育状況に応じて、下草刈り、枝打ち、間伐などが必要になってきます。専門の技術者でないとできない作業もありますが、子どもたちもかかわれる作業も数多くあります。地元の指導者に学びながら、森を元気にするための仕事を手伝ってみましょう。



④ 森に親しむために－地域材を用いた散策道づくりやウッドデッキ作り－

森の手入れをすると、間引きをした木材や竹材などの間伐材がたくさん出てきます。ただ捨てるのはもったいないこれらの材を使って、散策道や看板作りに生かしていきましょう。また専門の人にも協力してもらえれば、東屋やウッドデッキなどの森林観察の拠点施設に利用することもできます。様々な人たちとのかかわりをつくることで、より一層森に親しむためのツールとして再生させる可能性が広がります。もちろん炭を焼いたり薪として燃料に使うことも可能です。



⑤ またぎのおじちゃんから学ぼう

山村に長年住み、植物や動物の生態に詳しく、それらを活用して暮らしてきたまたぎのおじさんたちの話を聞いてみましょう。冬であれば、マタギ猟のお手伝いをしながらの雪の里山歩きも楽しみです。

その土地ならではの暮らしの知恵と技術、森に係るための決まり事など、厚い生活文化の一端を感じるようになると思います。そしてそうした大切な地域の宝をどのように守り次に伝えていくかを学び実践に課していくためのヒントが得ていくことが大切です。



(2) 里の恵みと学び

地元の方々が暮らす里は、周囲の自然の恵み効果的に利用した農業を中心とする生業を作り出しています。またそこには自然の活用術だけではなく、集落を基本単位とした互助・共同の近所づきあいの風景があります。

① 田んぼ

米作りは東北農業の主要な分野を占めてきました。春の田植えから秋の収穫まで、里の労働の一年は米作りを基本にしながら配置されています。田植え、田の草取り、夏の水の管理、稲刈りといったそれぞれの作業段階に応じた学びがあります。

今、米作りでは田んぼの水辺環境などで生息する生き物にも配慮した安全安心な作物作りが目指されようとしています。かつて行われてきた自然の力を借り、人々の共同作業が生み出すきめ細かな田んぼ環境づくりが価値あるものと再認識されはじめています。



② 畑

特に中山間地域の村では多種多様な作物を少しずつ、季節に応じて植え付け、収穫していくという「少量多品種」の畑作りがされています。暮らしに必要なものを大切に育てながら活用していく姿勢からは、自然の恵みを生かすことの大切さと作物を育てることが持っている喜びを垣間見ることができます。地域に根差して受け継がれてきた「伝承野菜」の保全活動も始まっています。



③ 集落の家並み

裏山から水を引き込み、庭には有用植物を植え、暮らしに役立つ道具類を収納し、暮らしの楽しみを生み出す食や遊び、くつろぎを作り出す様々な工夫があります。農家の古民家をのぞくと、近くの山から切り出した大きな木材をその形状に応じて活用しており、見ごたえがあります。囲炉裏が現役で活躍しているところもあり、今も人々の交流と憩いの場となっています。



④ ものづくり・郷土料理の数々

小屋をのぞくと、そこには里の生業に必要な民具が発見できるでしょう。かつて使っていた馬具やわら細工作りのための道具など、昔の暮らしの様子も学ぶことができます。



⑤ 敬うこと・年中行事—神社仏閣、自然神—

里には様々な神様がいらっしゃいます。山の神様、水の神様、蚕の神様・・・など地域の暮らしに根差して見守っている神々です。それは敬いながら地域の楽しみでもある様々な年中行事も今に引き継がれています。暮らしと信仰の一端に触れることは、里の暮らしを支える基本的な考え方と姿勢をより理解するためのよすがになるのではないのでしょうか。



(3) 川の恵みと学び

最上川流域では、様々な魚類とそれを利活用した暮らしの営みが見られます。ここでは、川に生息する生き物、川漁、そしてそれら川の自然と文化を学び楽しむ方法について触れてみます。

① 川の生き物たちー水辺の観察会のすすめー

最上川には、サクラマス、サケなど海から遡上する大型魚や、ヤツメウナギやアユやモクズガニなどの川漁で貴重な魚資源の他にもカジカなど多様な動植物が生息しています。支流に行けばヤマメやイワナなど清流の生き物もいますし、湧水にはサンショウウオなど小型の生き物生息しています。河畔の植物は季節ごとに美しい風景を作り出します。

水辺の生き物や植物の観察は玉網や仕掛け網などを用いて行えます。また、地元漁師さんたちから川の生き物の生態を聞くことで、見つけるコツが理解できるでしょう。



② 川漁

季節によって海と川の上流とを上下する川魚は、その時期ごとの多様な川漁を生み出しています。春はヤツメウナギ、サクラマス、春ガニ。夏はアユ。秋はモクズガニ、サケなどです。その他支流に入れば春から秋にかけてヤマメやイワナの魚釣りが盛んです。森が豊かで川がきれいだからこそ得られるこれらの川の恵みを伝えていくためにも、守り維持し活用していくための知恵や技術、考え方を学んでいくことがとても大切です。



③ 川舟

最上川を語る上で欠かせないのが川舟です。現在使われているのは笹舟、石船と呼ばれている全長10メートルほどの小型の木造船です。伝統的な工法で良質の木材を使って作られています。今は最上川流域では舟大工は1人だけになってしまいました。同じ流域でもエリアや用途によって様々な形状や大きさのものがあります。舟運の中心地点だった清川地区には舟の安全航行を祈願した舟玉神社がまつられています。



④ 川遊び

笹舟遊び、カヌー遊び、川船での観察、水遊びなど、川では様々な体験ができます。地元の川に詳しいおじさんたちと、川の生き物に触れ、またそこでの楽しみ方を学びましょう。川面から眺めは、違った視点から自然や暮らしの営みについての学びを促してくれるでしょう。



(4) 海の恵みと学び

最上川が注ぎ込む日本海は、年間を通じて様々な恵みをもたらす母なる海です。庄内の沿岸部はもとより、沖合にある飛島は全島が漁場という豊かさです。海での体験学習は、昼間だけではなく夜も夜光虫の観察や星空の観察など、日常ではできないことも可能にしてくれます。

体力も必要なこれらの学びからは、自然の恵みとともにその厳しさ、大切さを感じさせてくれるでしょう。ここでは、海の様々な表情を写真で紹介しながら、漂着ごみなど課題についても触れてみたいと思います。

① 海其自然体験

泳ぐ、生き物を観察する、その恵みをいただくなど、様々な体験が海では可能です。また、夜は夜光虫の観察や星空観察も楽しみです。豊かな海の恵みを存分に体験しながら、自然の豊かさを感じ取る学びを深めてみましょう。



② 漁の営み

海の漁師さんたちは、年間を通じて豊かな海の恵み運んでしてくれます。天気の見方、海流の見方、そして魚の特性など、海の生態系に関する暮らしや生業に根差した知恵袋と言えるでしょう。海漁師さんからは、魚の取り方からその料理方法まで、海と魚の特性

を生かしてどのように利用していくかについて、面白いお話が聞けるでしょう。



③ 海辺の課題と保全活動

近年、日本海沿岸では漂着ごみの問題が深刻になっています。海辺で捨てられたものだけではなく、内陸部で捨てられたものも川で運ばれ、海に流れ着いています。それは国境を越えて海外にまで広がります。

私たちの消費文化がもたらしたこれらの弊害を解決していこうとNPO団体等が地元の漁師さんたちとともに清掃活動に取り組み始めています。しかし根本的な解決は、いかに海を汚さないようにしていくかということです。海辺のクリーンアップ作業に参加してみましょう。多種多様なごみを目の当たりにすることで、私たちの普段の生活に便利である反面様々な問題が凝縮されていることが垣間見ることができるでしょう。



4、自然と文化の保全と活用～学びから地域づくりへ～

農山漁村での学びは、森里川海の恵みとそれを守り維持し活用していく知恵と技術により手成り立っています。

それらの学びは実際に実践され、生かされていくことによってその価値を発揮することができます。今、農山漁村はあまり元気を失おうとしています。学んだことを生かして素晴らしい地域の宝物を継承し、新たに生かしていくための取り組みにかかわってみましょう。そのことは21世紀を生きる私たちの今後をより夢のあるものにしてくれます。なぜならば、本当に豊かに生きるためのヒントがそこには込められているからです。

学んだことを生かした実践事例の一端をいくつか紹介しましょう。

①森の資源を生かしたウッドデッキ作りと炭作り

間伐材を生かした観察施設の設置は、そのプロセスそのものが体験学習でもあります。そして、炭作りはバイオマスエネルギーや有機農法利用においても着目されています。



②里の資源を生かしたビオトープ作り

休耕田を生かしたビオトープ作りは、様々な生き物を育みます。水辺の保全や安全安心な作物作りを考える様々なヒントを与えてくれます。



③川の資源を生かす学習プログラム

水辺の観察会や川漁体験で、普段は見るできない川の生き物の営みやそれを利用し生業にする川辺の暮らし方について理解を深めます。



④海辺の観察会と散策道整備

海辺の環境保全を考えていくため、海辺に近づくような散策道の整備や海辺の環境を良くしていく森づくりを実践しています。

5、おわりに

農山漁村の森里川海の恵みは、人々の暮らしの中で育てられ活用されています。そしてそのための知恵や技術がとても大切であり、それをいま新たに継承していくことが求められているということ、それが本冊子で伝えようとしていたことでした。

学びを単なる知識にとどめるのではなく、生かし実践していくことで、地域の保全やコミュニティづくりに活用していくことが大切です。それは一方的に伝えるものでもないし受け取るものではない試行錯誤の結果生まれる双方向の学びを含んだものです。

本冊子では、これから農山漁村について学びを深め、長い付き合いでかかわり続けてくれる人の役立つことを願って作られました。多様な農山漁村の地域の人々の営みは、そこに飛び込んで見て初めてわかるということも多いということもあります。そして同じ農山漁村でも地域が違えば、がらっと異なります。こうした多様性こそ森里川海がもたらす豊かな恵みであるともいえるでしょう。そしてその多様な恵みには、様々な課題を抱える現代社会において、これから生きていくための大切なメッセージが込められています。

NPO 法人里の自然文化共育研究所は、前身となる角川里の自然環境学校（山形県 2003 年 8 月設立）から一貫してそれぞれの地域に密着し、地域から学び、創り出すという姿勢で取り組みを展開してきました。その姿勢は活動の規模や範囲が広がりかかわる主体が多様化しても変わることはありません。

活動の成否は、単なる地域住民の熱意や思いだけによりません。外から直接・間接的にかかわる様々な当事者との連携協働が構築できるか、相互のニーズをより広い視野に立って認め合い、議論だけではなく労力を出し合って実践活動に向かえるかどうかが重要だと考えます。外に開き多様な主体とともに学び合い関係を構築することは新たな可能性への道を開きます。しかし一方でそこには希望や喜びだけではなく、暗い様々な種類の困難や、時には悪意に満ちた危険にさらされることさえあるのです。

私たちは 2010 年、残した根の自立的成長を願いつつ山形県での主要業務に一区切りをつけ長野県に移転することを決定しました。これまでの取り組みを振り返るとともに、より広い視野に立って行動できるプラットフォームの構築に向けて実践的なノウハウの蓄積を行っています。次世代につなぐ農山漁村の里づくりを目指して私たちの挑戦の旅は続いています。

本冊子が素敵な日本のふるさとの原風景を次世代に伝え、新たに作り出していくことの一助になればと願っています。

2011 年 3 月 雪解けの信州より
NPO 法人里の自然文化共育研究所
専務理事 出川真也

2011年3月発行

NPO法人里の自然文化共育研究所

住所：長野県中野市大字深沢44番地（現在移転予定・定款変更申請中）

電話・ファックス：0269-26-5819

メール：icesrc@nifty.com

ウェブ：<http://homepage2.nifty.com/dega-web/>